

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第382回

司馬遼太郎

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和6年3月13日

編集委員：入試広報室 鈴木



今回の言葉

人間にとって、 その人生は作品である。

司馬 遼太郎は、日本の小説家、ノンフィクション作家、評論家。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章受章者。位階は従三位。本名は福田 定一。筆名の由来は「司馬遷に遼に及ばざる日本の者」からきている。大阪府大阪市出身。産経新聞社記者として在職中に、『梟の城』で直木賞を受賞。歴史小説に新風を送る。

Column

人生を例える言葉は例えば“旅”など、これまでも目にしてきましたが『作品』というものは初めてかもしれません。想像したくはないですが人生には必ず終わりの瞬間が訪れます。それまでに生み出した成果や功績、それらを生み出す時の苦労や日常の何気ないやり取りなどを含めた自分の人生の全てのシーンを『主演・監督：自分』という一本の“ドキュメンタリー作品”として私は捉えました。

今回の言葉にある“作品”というワードから、身近にある作品について考えてみました。真っ先に思い浮かんだのは『スマートフォン（以下スマホ）』でした。現在はほとんどの人が必須アイテムとして当たり前になっています。でも、使用頻度（スマホ依存度）は人によって違いますし、スマホではない携帯電話や携帯電話をそもそも使っていない人も存在します。次に思い浮かんだのは映画でした。アカデミー賞レベルの作品であっても観ない人は観ません。アクションシーンなどは特に映画館のスクリーンで観た方が楽しめると思いますが、スマホで完結するのがベストの人もいます。原作小説を読むだけの人もいます。そういう意味では現代までに数え切れないほど誕生したベストセラーの数々にも、共感しない人は必ず存在します。正解や不正解、趣味趣向について改めて“人それぞれ”と感じました。

当然の話ですが、何らかの作品を手掛ける時に“良いものにしたい”と努力します。それが自分の人生であればなおさらです。生涯の幕を閉じる時に『良い人生だったな（良い作品になったな）』と感ずることができたのなら、大切な人に自分の人生をそのように感じてもらえたのなら、それは人生の中で最高に幸せを感じた瞬間であり『最高傑作ができた』と自身の人生を誇れるのではないのでしょうか。それを“自己満”という言葉で片付けるのか“この作品の色”と捉えるのか。あなたの持つ“感覚”のようなものもあなたの作品の“色”に繋がっていくのかもしれませんが。自分という作品を手掛けるために手伝ってくれる仲間と互いに手を取り、自分という最高傑作を創り上げていきましょう！